

季刊誌 C E L 4 9 号

「 C E L からのメッセージ 」

大阪ガス エネルギー・文化研究所 副所長
安達 純

経済不況が深刻化し、暗くて長いトンネルの出口はなかなか見えてこない。そんな状況に影響されてか、「人間像」や「社会像」あるいは「文化」に関する論議も低迷している。しかし、このような時にこそ長い目で、大阪を、そして「都市」という存在と、そこに生きる人間・社会・文化のあり方を問うことが大切なのではないか。こうした問題意識から、大阪市立大学経済学部とC E Lが協力して、学生と一般社会人のための公開講座「未来都市を語る 生活・文化・環境と経済社会」を開催することになった。4月から7月半ばまでの約3ヶ月間、府下杉本町の大阪市立大学キャンパス内で行われる当講座は、毎回200名を越える熱心な聴講生で活況を呈している。

大阪市立大学とC E Lの二人三脚を実現させたのは、地域活性化への熱い思いである。地元との関係を大切にし、開かれた大学であることを創学以来の伝統とする大阪市立大学は、経済学部が今年で創立50周年を迎えた。本公開講座は、その50周年記

念事業の一環として行われるものである。一方、CELにとっては、10周年を兼ねた12周年記念事業である。CELの5周年には、ジオ・カタストロフィ研究という賑やかな記念事業を行ったが、10周年は阪神大震災で記念事業を見合わせ、今回12周年事業として行うものである。

本講座の狙いは次の2点である。第一に、経済の活性化だけでなく、文化、生活、エネルギー・環境など、さまざまな角度から、21世紀の都市のあり姿について検討を加えること。第二に、その「都市のあり姿」にどのようにして至るかという過程を少しでも明らかにすることである。

そこで、講師陣も多彩な顔ぶれとなった。登壇順に講師と演題を敬称略でご紹介すると、「文学から見た大阪、大阪人」難波利三（直木賞作家）、「だんだん畑のある団地 - 都市・環境・コミュニティ・文化のゆくえ」橋本敏子（生活環境文化研究所所長）、「アーバンアートと都市生活」今井祝雄（造形作家・成安造形大学助教授）、「エネルギー・環境と経済社会」領木新一郎（大阪ガス（株）取締役会長）、「NPOと21世紀の社会」早瀬昇（大阪ボランティア協会事務局長）、「茶道の心、哲学」千宗室（茶道裏千家家元）、「大交流時代の到来と観光産業」石森秀三（国立民族学博物館教授）、「都市開発とアート性、賑わい」橋本固（（株）大阪防水建

設社取締役副会長)、 「演劇の世界と集客都市」河内厚郎(演劇評論家、プロデューサー)、 「豊かな都市環境と建築、自然」遠藤剛生(建築家)、 「企業、市民と文化都市の形成」古舘 晋(CEL所長)、 「世界の都市開発と大阪、関西」大久保昌一(大阪大学名誉教授)、 そして「総括講義」福原宏幸(大阪府立大学経済学部助教授)、 ならびに締めくくりとしてのシンポジウムである。

こうした錚錚たる講師陣が、理論もさることながら、実践に重きを置いた問題提起を行い、それが起爆剤となって、「関西ここにあり」「関西文化ここにあり」という旋風が巻き起こることを期待したい。

なお、最終日(7月10日(土)1時30分~4時)に行われる総括講義ならびにシンポジウムについては、これまでに申し込んでおられない方でも聴講が可能である。もしご希望の方があれば、大阪府立大学経済学部 教務係(Tel 06-6605-2253)までご連絡いただきたい。また、後日、講義内容を1冊の本にまとめて出版し、聴講生以外の方にもご覧いただけるようにする予定である。

以上